

で き ご と

10月14日(金)、当館では、平成28年度公立図書館等職員専門研修「児童・青少年サービス研修」が開催されました。参加者は県内の公共図書館で児童・青少年サービスを担当している図書館員です。

今回は、吉住幸子氏(常葉大学教育学部非常勤講師、牧之原市教育委員会、元御前崎市立図書館長)を講師に迎え、図書館が他機関と連携する児童サービスの方法についてお話しいただいた後、ブックトークとアニメーションについても実演を含めてお話しいただきました。(2ページ目にて、概要を紹介します。)

11月7日(月)、今年もグランシップを会場に「静岡県図書館大会」を開催しました。

午後はテーマ別に分かれての分科会が行われ、そのうち子どもの本に関する分科会は2つ開催されました。まず、第2分科会「子どもと

楽しむ科学絵本～科学絵本をもっと身近に～」では、科学絵本や科学あそびを普及されてきた塚原博氏(実践女子大学教授)からお話しいただきました。また、第3分科会「読む力が未来をひらく～子どもに本を手渡すために大人ができること～」では、脇明子氏(ノートルダム清心女子大学名誉教授)から、子どもの読書についてお話を伺いました。(3ページ目にて、第2分科会の概要を紹介します。)

◇子ども図書研究室新刊サロンのご案内◇

新刊を囲んでおしゃべりしませんか?

日 時: 12月10日(土)

2月15日(水)

いずれも10:30～12:00まで

会 場: 県立中央図書館 子ども図書研究室

申込・問合せ: 054-262-1246

◇イベント情報その1◇

◆世界のバリアフリー絵本展 —IBBY 障害児図書資料センター2015 推薦図書展—

会 場: 静岡県立大学短期大学部事務・図書館棟2階ギャラリー(所在地: 静岡市駿河区小鹿2-2-1)

期 間: 平成28年12月18日(日)～12月28日(水)

時 間: 10:00～16:30 ※12月28日(水)は13:00まで

◇イベント情報その2◇

◆世界のバリアフリー絵本展記念講演会「世界のバリアフリー絵本って何?」

講 師: 攪上 久子氏(日本国際児童図書評議会バリアフリー絵本展実行委員長)

会 場: 静岡県立大学短期大学部 講堂(所在地: 静岡市駿河区小鹿2-2-1)

日 時: 12月23日(金・祝日)10時～11時30分

◇両イベント共通事項 申 込: なし

参加費: 無料

問合せ: 静岡県立大学短期大学部こども学科(電話: 054-202-2679)

◇イベント情報その3◇

◆教員のための博物館の日 —先生が子どもに戻って博物館を楽しむ日—

会 場: 静岡科学館る・く・る(所在地: 静岡市駿河区南町14番25号エスパティオ8～10階)

期 間: 平成29年2月4日(土)

対 象: 教員、教育関係者、博物館関係者、教員志望の学生、博物館や理科に興味のある大人など

主 催: 国立科学博物館、公益財団法人日本博物館協会

問合せ: 054-284-6960(静岡科学館る・く・る)

公立図書館職員専門研修 児童青少年サービス研修

最初に、吉住氏が御前崎市立図書館で実際に他機関と連携して取り組んだ児童サービスについてお話しいただきました。

現代の子どもは習い事が多く、本を読む時間が少なくなっています。未来の図書館利用者を育てるためにも、図書館員は学校などに出かけて読書支援をすることが必要であるとお話されました。学校では、児童生徒へのブックトークやアニメーションをすることはもちろんですが、学校図書館の資料の選書や廃棄、保護者への読み聞かせや読書についての講座の実施、図書委員会への支援などもされたそうです。

今後の課題として、授業等で使う特定のテーマの資料を公平に貸出できるようなスケジュールなどの工夫や、子ども向けの郷土資料の充実が上げられました。地元の学校が公共図書館に何を求めているかを知り、利用してもらうことが大切とのことでした。

その他、御前崎市の読書推進活動においてボランティアの方に活躍してもらうためのネットワークづくり「なぶら読書ネットワーク」や幼稚園・保育園への働きかけ、行政機関との関わりなどについてもお話しいただきました。

上記のように、学校への児童サービスをする際にまず有効なのがブックトークやアニメーションです。

ブックトークとは、ある一つのテーマに沿った本を何冊か紹介することです。小学校中学年くらいから、さらに同じくらいの年齢の子どもを対象に行うことが向いているため、不特定多数の子どもが集まる公共図書館よりも、学校で行うことに適しているそうです。

ブックトークを作成するときには、紹介したい本を核にして他の本を選ぶ方法と、まずテーマを決めて関連した本を選ぶ方法とがあります。

どちらの方法でも、最初は実際に使う本の2倍は本を集め、そこから分野に幅を持たせて紹介する本を決めると良いそうです。また、紹介する本には自分の好きな本を入れるとブックトークが生き生きとしてくるそうです。

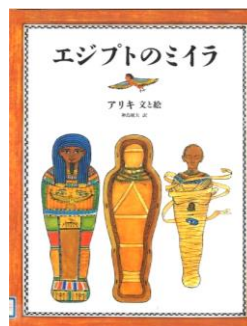
アニメーションとは、遊びやゲームを取り入れて子どもの読む力を引き出すため、スペインで開発された教育メソッドです。読書習慣のない子どもに読書の楽しさを味わわせたり、興味の薄い分野の本へ関心を広げたりするのに有効だそうです。

今回はひとり読みにつなげることを目的に『まゆとおに』（富安陽子／文 降矢なな／絵 福音館書店）を題材にアニメーションが行われました。まず読み聞かせをしますが、その際、後でこの話からクイズが出されることが予告されます。読み聞かせを楽しんだ後クイズが出題され、事前に分けられた班毎にクイズに答えます。

研修では、吉住氏のブックトークとアニメーションの実演を体験した後、参加者も演習をする時間が設けられました。今後、県内各地の児童サービスがより充実することが期待されます。

所蔵資料から

知識



『エジプトのミイラ』

アリキ／文と絵

神鳥統夫／訳

佐倉朔／監修

あすなる書房

2000年12月

(1981年 佑学舎刊の再刊)

講師が実演したブックトーク「体って不思議！ミイラって知ってる！」で紹介したうちの1冊。細かい絵でミイラの作り方を丁寧にわかりやすく書いているのに惹かれ、本書を核にブックトークを作成したそうです。（眞子）

静岡県図書館大会 第2分科会 幼児・児童に対するサービス報告

長 年にわたり科学絵本や科学あそびを普及されてきた実践女子大学教授の塚原博氏に「子どもと楽しむ科学絵本～科学絵本をもっと身近に～」というテーマでお話しいただきました。

ま ず最初に塚原氏から、「子どもは生まれながらに自然って美しいな、不思議だな、と感動する心をもっており、子どもが持っている驚異の念、好奇心、観察力、探究心が育つ手伝いをするのが、大人の責任である」というお話がありました。

「科学絵本というと、大人はどうしても子どもに何かを教え込むための道具として考えがちだが、すぐに「かしこく」なるようなものではない。しかし全く役に立たないのではなく、ゆっくりと間接的に、そして必ず役に立つものです」というお話が印象的でした。科学絵本も物語絵本などと同じように楽しめばよいとのことでした。また、「科学」と構えると難しくなってしまうので、「身近なものへの興味」と捉え、楽しむことをすすめられました。

科 学の本を子どもに伝える大人の役割として、まずは優れた科学読み物をたくさん知り、手に取って自ら読んでみるとよいということで、科学絵本のリストを掲載している以下の本が紹介されました。

- ・『科学の本っておもしろい』（科学読物研究会／編 連合出版 1981年）※続編もあり
- ・『子どもと楽しむ科学の絵本 850』（子どもと科学をつなぐ会／編 メイツ出版 2002年）

講 演では多くの科学絵本が取り上げられました。その一部を紹介します。

- 子どもたちと一緒に科学遊びをするときに向いている絵本

・『よわいかみつよいかたち』（かこさとし／著・絵 童心社 1968年）

・『風車をまわそう』（おおたけさぶろう／文 つきだたかよし／絵 国土社 1981年）

●身近なものへの興味を促す絵本

・『たんぽぽ』（平山和子／ぶん・え 福音館書店 1976年）

●子どもに知識を与えることを目的とする絵本

・『10にんのきこり』（A.ラマチャンドラン／さく 田島伸二／やく 講談社 2007年）

・『まりーちゃんとひつじ』（フランソワーズ／文・絵 岩波書店 1956年）

絵 本の紹介の他、子どもと科学絵本を結びつけるための方法についてもお話がありました。

川が上流から海にたどりつくまでを描いた『かわ』（加古里子／絵 福音館書店 1962年）と、地面の下で暮らす生き物たちの姿を描いた『地面の下のいきもの』（大野正男／文 松岡達英／絵 福音館書店 1988年）は、何枚もの絵が巻物のように繋がるよう仕立て直したものを実際に会場内で見ることができ、参加者から感嘆の声があがりました。

またこの他にも、科学の本に書かれている実験を子どもと一緒にいった時の写真を見せてくださいました。『卵の実験』（伏見康治、伏見満枝／著 福音館書店 1977年）に掲載されている、何も使わずに卵を立てる実験等では、子ども達の楽しそうな表情が印象的でした。

所蔵資料から

絵本

『はははのはなし』

加古里子／ぶん・え

福音館書店

1970年



歯について身体全体との関わりを交えながら紹介されている。今回の講演では、子どもに知識を与え解明するだけではなく、それを文学作品として仕上げた絵本として紹介された。（安田）

知識



『子どものうちに知っておきたい!おしゃれ障害』
岡村 理栄子／監著
少年写真新聞社
2016年7月

おしゃれ障害とは、つけまつげ、ピアス、カラーコンタクトレンズなどのおしゃれをすることにより、肌や身体に起こるトラブル。最近では、小学生や中学生にも多く起きている。

本書は、皮膚科医院院長である著者が、その対処と指導方法を解説したもの。監修者に眼科クリニック院長なども加わっている。難しい用語や症状説明には、理解の手助けとなるよう写真や図解が掲載されている。その他「洗顔のポイントQ&A」や「電車内で化粧はあり?なし?」といったコラムなどが読める。巻末に索引あり。 【小学校高学年から】(仲本)

文学



『駅鈴(はゆまのすず)』
久保田 香里／作
くもん出版
2016年7月

奈良時代、平城京と東の国々を結ぶため国家が整えた駅路(はゆまじ)にある駅家(うまや)では、馬の飼育や国の使者である駅使(はゆまづかい)の世話をする駅子(うまやのこ)が働いていた。駅家の娘小里は、女にできる仕事ではないと言われながらも駅家の仕事を誇りに思い、駅長(うまやのおさ)になることを夢見る。歌を詠む見習いの駅使、若見はそんな小里の夢を応援してくれた。戦や地震、相次ぐ遷都で混乱した時代に、夢を持ち成長する少女の姿を史実を元に描く。

【小学校高学年から】(眞子)

絵本



『みみずくのナイトとプードルのデイ』
ロジャー・デュボアザン／さく
安藤 紀子／訳
ロクリン社
2016年6月

夜行性のみみずく“ナイト”と昼間に活動する犬のプードル“デイ”が友だちになったら? ナイトとデイが仲良くなり、会って話ができるというしあわせな時間をやっと見つけたのに、人間(大人)の都合で危うくなる。しかし、最後はこどもの発想によりハッピーエンドに。

みみずくとプードルの生活対比や、すれ違いのなかで友情を深める様子が具体的に描かれ、子どもにもわかりやすい。原著は1960年に発行されたが、現代でも十分楽しめる1冊になっている。 【小学校低学年から】(青山)

絵本



『アマミホシゾラフグ』
江口 絵理／ぶん
大方 洋二／しゃしん
友永 たろ／え
ほるぷ出版
2016年7月

1995年に奄美大島近くの海底で発見された直径2メートルのミステリーサークル。これが体長10センチ程の新種のフグによって作られたものであると報告されたのは2014年。本書では、フグがヒレやお腹を使って器用に砂に凹凸を付け、サークルを作る様子を写真やイラストで紹介している。砕いた貝殻を飾り付けに使うなど、小さな魚の仕業とは思えないほど手が入っており、このフグの発見が驚きをもって迎えられたことが伝わる絵本である。

【小学校低学年から】(安田)